

『佐賀医人伝』を改訂します。

会員の皆様のご協力で、『佐賀医人伝』の販売も順調で、事務局にある残部もわずかになりました。そこで、1月22日に臨時役員会を養正会薬局で開催し、『佐賀医人伝』の改訂版を発行することになりました。

詳細の編集方針は、2月8日の編集委員会で話し合っ、皆さんにご提案いたしますが、その主な内容は次のようになります。

- 1) 誤植訂正・・・必要最小限、
- 2) 新規医人挿入・・・10～15人以内
- 3) 索引の作成・・・人名索引のみ
- 4) 9月末までに完成。

各執筆者の皆さんは、いまから準備を御願います。また、会員の皆さんは各編集委員（鍵山稔明、青木歳幸、相良隆弘、大田善郎、樗木等、佐藤英俊、樋口浩康、前山隆太郎）に情報をお寄せください。

佐賀医学史話

佐賀医学史研究会報 110号、2018年2月号投稿「峯源次郎日曆」よりその11

一蒲原大蔵が描く嘉永2年佐賀藩

領の医者情報一

多久島澄子

村に一人の医者あり

「峯源次郎日曆」を本格的に読み始めた頃、故小宮睦之先生から蒲原大蔵の著作「町々飭評番」（嘉永2年：1849）に「今は昔と違ふて、漢（漢方）と蘭（蘭方）のいしや（医者）か村（むら）次（なみ）に言人ツゝおらぬ村はなか」の一節があることを、教えてもらった。平成16年3月刊行の『佐賀県近世史料』第9編第1巻883頁に読むことができる。巻末に「編さん委員、佐賀市文化財保護審議会委員小宮睦之」とある。

「佐賀藩の村々に、嘉永2年には、村ごとに漢方か蘭方の医者が一人ずつは居た」という情報を、小宮先生は、平成16年に、筆者に提供してくださっていたのである。

一編舎十九蒲原大蔵

蒲原大蔵とは、天明3年（1783）佐賀藩士相良求馬敬真の二男として生まれ、蒲原次右衛門（孝古）家に入り、孝古の二女（十百）を妻とした。24歳になった文化3年（1806）には部屋住の身で着座（家老に次ぐ家格）に召された。長崎詰勤番だった養父孝古が、文化5年のフェートン号事件の際、「指揮不束之義有之」と責を負って自刃し、名跡を召し潰され、大蔵は牢人となる。文化8年、再び物成130石で平士に召し出され、同11年40石加増、その後着座を仰せ付けられ30石を加米された。だが、文政13年（1830）2月14日に致仕した。まだ48歳で、同月7日に藩主斉直は退き、直正の治世となる。ここからは一編舎十九と称し、戯作者として作品を書

き続け、安政4年(1857)4月2日没した。墓所は佐賀市嘉瀬町、蒲原山臨滄庵。戒名は従容軒一閑梅翁居士。享年75。

学問文才のある大蔵

『鍋島直正公傳』2篇296頁には、「文化戊辰に切腹したる長崎番頭蒲原孝古の子大蔵は学問文才あり、公に仕へて着座に列せしが、坂部(三十郎)と相協せず、早く隠居して敷山社付近に住み、戯作の小冊子を書いて時政を諷刺し、其書は競うて人の読むところなりき。…略…公(直正)も是を見て興ありとなし、節立ちたる出来事あれば、山の老翁(じじい)の書はまだ出ぬかと仰せられきという」とあり、藩主の経世の立場にも応え得る部分があったことを思わせる。

大蔵作品にみる幕末医療の一端

大蔵の作品の中で医学に関わるものを①『町々飭評番』の他に探してみると、

②『植疱瘡軽安録』、この本の成立は「佐賀藩で種痘が始まる嘉永2年8月から間もない頃」で、内容は「蘭方医学の流入が社会に与えた衝撃を面白く物語る。疱瘡の神も菓子屋も人形屋も実入りが減り、一方では人口過剰を招くだろう」。

③『三法論議集』、冒頭のお達は『徳明一代記』(佐賀県立博物館蔵)の嘉永4年2月13日条に、医師への「与内達帳写」として出ている。凶作へのお救い米は3月のことなので、この嘉永4年夏ごろ書かれたもので、内容は「医術の流派の解説に始まり、次第に神仏問答となり、孔子の尊を取り入れて、儒・仏・神の宗教論議めかして終わる」。

『町方盛衰記』の玄南探索

④『町方盛衰記』、成立は嘉永末年以降、内容は、富家・貧家の世相を書き分け、最後に橋下に住む親子の人間性を描いて、人生の苦難を乗り越えて老境に至った、作者の眼の温かさをしのばせる。洒脱な滋味ある佳品。992頁に、長兵衛(父親)と、ヤ助(息子)の会話の中に、「玄南さんから薬とつてけへ」とある。ヤ助は武家奉公先で矢継ぎ早に言いつけられる用事の中に、主治医の所へ薬を取りに行く用事としてこのセリフを言っている。ではこの玄南とは誰であろうか。時は嘉永末年(7年=1854)として、松隈元南(文化12年=1815~明治11年=1878)ではないだろうか。佐賀藩医松隈甫庵の長男の元南とは、物成85石、嘉永7年には40歳。住所は片田江。

「医業免札姓名簿」に父親甫庵は6番目に、元南は11番目に内科・眼科医として登録されている。漢蘭折衷派として活躍し、文久2年(1862)頃から直正の侍医となり、傍ら、多くの人材を育てた。『明和8年佐賀城下屋鋪御帳扣』によれば、片田江豎小路西側3番に弘化2年(1845)12月から住んでいる。

ヤ助の言う「玄南さん」が、松隈元南としたならば、《佐賀藩トップクラスの藩医で、腕も人望もある片田江豎小路西側3番の松隈元南は、繁盛している漢蘭折衷の医師の象徴として、蒲原大蔵が登場させた》ものと思われる。ちなみに、「医業免札姓名簿」の170番、峯静軒(峯源次郎父)の師は松隈甫庵で、322番峯亨(源次郎兄)の師は松隈元南とある。源次郎も明治11年に建立された松隈元南の建碑者の一人として、名前を刻されている(佐賀医学史研究会報107号)。

医者増加と蘭方医

「今は昔と違ひて、漢(漢方と)蘭(蘭方)のいしや(医者)か村(むら)次(なみ)に壺人ツへおらぬ村はなか」という、「佐賀藩領、嘉永2年の貴重な状況」を小宮睦之先生から教えてもらってから、既に十年余の歳月が経過してしまった。十分に理解して発表できるまでにはこの位の時間が必要ということなのであろう。

『鍋島直正公傳』第三篇584頁、嘉永5年秋には「医術のみはその漢方に優るといふは殆ど定論となるに至れり」とある。つまり、嘉永5年秋には「医学は蘭方が漢方より優れているという定論が成立していた」と、久米邦武は書いている。この稿終り。

緒方洪庵の大坂適塾と肥前門人

大坂の適塾門人は、『適々斎塾姓名録』には637人が記載されている。そのうち、肥前(佐賀県)出身門人は、以下の34人が知られている。番号は『適々斎塾姓名録』記載順。

33	迎文益	西肥神埼郡	佐賀県		医→医
87	伊東玄敬	肥州藩	佐賀県	弘化三年九月一二日入塾	医→医
129	渋谷良耳	肥前佐賀	佐賀県		医→医
130	志田春庵	肥前武雄	佐賀県		医→医
131	坂本徳之助	肥前佐賀藩	佐賀県	嘉永元年初秋	医→医
134	佐野栄寿	肥前佐賀藩	佐賀県	嘉永元年中秋 1	医→官僚
135	宮田魯斎	肥前佐賀藩	佐賀県	嘉永元年中秋	医→医
161	大中玄哲	肥前佐賀中原、	佐賀県、	嘉永二年七月一〇日入塾	医→医
172	尾形良益	肥前多久	佐賀県	嘉永二年九月二〇日入門	医→医
174	井上静軒	肥前佐賀	佐賀県	嘉永二年一〇月五日入門	医→医
176	朝日宗郁	肥前佐賀	佐賀県	嘉永二年一一月六日入門	医→医
229	中西仲英	肥前武雄	佐賀県	嘉永五年初夏	医→医
262	岩谷玄良	肥前武雄	佐賀県	嘉永六年五月	医→医
267	吉田泰春	西肥佐賀	佐賀県	嘉永六年六月	医→医
300	武富文益	肥前佐賀	佐賀県	嘉永六年	医→医
328	永尾卯吉郎	肥前藤木田中村	佐賀県	安政二年三月二日入門	医→医
374	瀧野文道	肥前佐賀	佐賀県	安政三年四月二日入門	医→医
381	蒲原豊安	肥前佐賀	佐賀県	安政三年五月一七日入門	医→医
419	本野周造	肥前	佐賀県	安政四年七月二四日	医→ジャー
ナリスト					
435	相良寛斎	肥州佐賀藩	佐賀県	安政五年二月八日入門	医→医
458	馬渡礼介	肥前佐賀	佐賀県	安政五年一〇月八日入門	医→医
463	河原謙吾	肥前佐賀	佐賀県	安政五年一一月二五日入門	医→医
474	西岡周碩	肥前佐賀藩	佐賀県	安政六年三月六日	医→法律家
480	西 春濤	肥州多久	佐賀県	安政六年三月一一日	医→医
492	小出文堂	西肥佐賀	佐賀県	安政六年六月四日入門	医→医
516	中野雲圭	鍋島藩	佐賀県	安政六年一二月一六日入門	医→医
546	大須賀道貞	肥州佐賀	佐賀県	万延元年六月九日入門	医→医
547	古賀元才	肥州佐賀	佐賀県	万延元年六月九日入門	医→医
548	福地文安	肥州佐賀	佐賀県	万延元年六月九日入門	医→医
573	花房元淑	西肥佐賀藩	佐賀県	万延二年二月二三日入門	医→医
574	後藤祐益	肥州佐賀	佐賀県	万延二年三月五日入門	医→医
207	中村俊策	肥前	佐賀県	嘉永二年五月入門	—
475	斎藤春庵	肥前	佐賀県	安政六年三月六日	—
476	角春静	肥前	佐賀県	安政六年三月六日	—

◆ 迎文益は帰郷して医を開業したが詳細は不明。

◆ 伊東玄敬は、肥前仁比山村御厨清兵衛二男で文政12年(1829)生まれ。天保7年(1836)5月から伊東玄朴の養子となった。安政5年(1858)に奥御医師見習

いとなるも万延元年（1860）5月2日没す。享年32。浅草天龍院に葬る。法名泰龍院潜岳玄圭居士。

◆渋谷良耳は渋谷良次ともいう。佐藤英俊執筆「渋谷良次」（『佐賀医人伝』）に生涯が詳しく出ている。文政9年（1826）生まれで、嘉永元年（1848）に適塾に入門した。越前藩士で医師の橋本左内が適塾生のときの塾監が渋谷良耳であった。塾監は内塾生の生活指導に責任をもつものであったので、指導力も認められていたものだろう。

良耳は、退塾後は、嘉永6年（1853）に蘭学寮指南方に取り立てられ、安政5年（1858）に西洋医学校好生館が創設されるとその教導となり、好生館の教育課程や規則などを整備し、医学教育にあたった。明治2年（1869）に佐賀藩の代々医となった。

明治4年、10代藩主直正の死にあたり、側で松隈元南とともに直正の死をみつめている。明治5年7月、開拓使五等出仕に任ぜられ、札幌病院初代院長に就任した。

北海道立文書館に、渋谷良次が札幌に就任した当時の記録が残されている。

明治五年壬辰六月廿七日

開拓使六等出仕被仰付候事

同七月廿三日

開拓使五等出仕被仰付候事

同月廿七日

一 札幌詰可之有事

明治六年二月十九日

開拓使六等出仕被仰付候事

（明治五年『奏任官人履歴録』）

札幌の医学生教育体制を整え、病院機能の近代化や管内出張病院の整備などを矢継ぎ早に進めたが、新政府の財政難により、わずか一年二ヵ月で解任され、明治6年10月に東京に戻った。以後、東京で医療活動を続けた。

明治6年当時、札幌病院に在籍していた佐賀県出身者は、医師で渋谷良次、秀島文圭、峯源次郎、渋谷文次郎、三浦元硯、宮崎養策、重松裕二、古川融、医師以外には大久保幸孝（電信掛）、真崎健（大主典）、福島万象（医局筆記）、池田玄恭であった（佐藤英俊「渋谷良次」『佐賀医人伝』）。

渋谷良耳門人の医師でのちに大蔵省に勤務した峯源次郎の『日曆』によれば、相良知安、永松東海らと観梅にでかけるなどの交友がみられ、「（明治23年7月）17日 Thursday 晴上省退省訪シーボルト氏、晡時渋谷氏来る」とあり、アレクサンダー・シーボルトが大蔵省の翻訳官として活動していた時期に渋谷良耳もまた峯源次郎との接触を頻繁にしていた。源次郎の『日曆』は明治24年で終わるのでその後の渋谷良次の活動は不明である。

参考文献は、佐藤英俊執筆「渋谷良次」ほか、『鍋島直正公傳』、宮下舜一「札幌病院初代院長渋谷良次の肖像写真をめぐって」（『薬史学雑誌44（2）』）、開拓使公文録原稿職官之部四着発（簿書5717、明治5年）『市立札幌病院130年史』（1999）など。史料は北海道立文書館に所蔵されており、いつか詳しく紹介したい。

◆坂本徳之助は、帰郷後。安政元年（1854）には、佐賀藩蘭学寮の医学指南役として西洋医学を指導した。

◆佐野栄寿（佐野常民）は、文政5年（1822）、早津江津の下村家に生まれた。佐賀藩医佐野孺仙の養子となり、京都の広瀬元恭、大坂の緒方洪庵、紀州の華岡塾、江戸の伊東玄朴塾で外科を学び、帰藩後は、佐賀藩の理化学工場である精煉方の主任として火薬や蒸気船等の製造にあたり、パリ万博にも参加した。西南戦争で敵味方無く手当をする博愛社を設立し、これがのちの日本赤十字社の創設につながった。佐野は新政府の官僚として活躍したが、その原点には外科医としての活動があった。明治35年（1902）没。写真は青山霊園にある佐野常民墓碑。



◆宮田魯斎は、嘉永元年（1848）8月に緒方洪庵塾に入塾し、一年後の嘉永2年（1849）11月2日に象先堂に入門し、佐渡の柴田収蔵が象先堂塾に在塾中の嘉永3年11月段階には、一緒に学んでいた。その後、松本良順門人として、安政3年（1856）に来日したオランダ商館医ポンペに学んだ。帰郷後、安政5年（1858）12月に発足した佐賀藩医学校好生館が、片田江に開設され、教頭大庭雪斎、大石良英、教導島田南嶺、永松玄洋、宮田魯斎、相良弘庵、教職山村良哲、樵林蒼寿、城島淡海、林梅馥、助手牧春堂の教師陣で、ポンペ式西洋医学教育を教育した。魯斎の明治期の事績は不明。

◆大中玄哲は、嘉永2年7月10日に入塾し、唐津で開業していたらしく、明治4年唐津藩の学制改革で、耐恒寮に英学者高橋是清を招いたとき、医学寮の教師大中春良として就任している。

◆尾形良益は、肥前多久（現多久市）出身で、嘉永2年9月20日に緒方塾に入門し、帰郷後は多久で種痘などの地域医療に従事した。万延元年（1860）閏3月20日に佐賀藩引痘方医師松尾徳明が多久へやってきたとき、在村医師の山口元逸、鶴蔵六、尾形良益、岡橋賢道の4人が手助け医師として種痘を行っている。（松尾徳明『引痘方控』・佐賀県立博物館蔵）

多久における有力蘭方医の一人であった。

◆井上静軒は、華岡青洲門人で外科医井上仲民の孫。父仲乙も華岡青洲門人で、天保5年（1834）に開設した佐賀藩医学校医学寮の外科医教師となった。その養子文雅は、もと佐賀藩医城島友竹の二男で、嘉永2年3月28日には華岡家入門し、同年10月5日に緒方洪庵入門した。万延元年（1860）に、長崎で松本良順門人井上仲民として、オランダ商館医ポンペ入門。文久2年（1862）好生館指南役となり、ポンペ式西洋医学を教授。明治6年（1873）10月10日に没した。

◆本野周造は、本野盛亨といい、佐賀藩士本野権大夫の養子。大坂で広瀬旭荘に学び、安政四年（一八五七）に適塾入門。その後、長崎で佐賀藩英学塾致遠館で英語を学び、慶応三年（1867）英国公使パークスらとの交渉に奔走した。維新後は、明治3年（1870）に日本最初期の活版印刷社日就社を設立。明治五年に駐英公使館一等書記官としてロンドンに赴任。明治七年に、子安峻らと読売新聞社を創業し、のち明治22年に二代目読売新聞社社長となった。

◆相良寛斎は、相良安定ともいい、佐賀藩医相良柳庵の長男として佐賀に生まれた。弟で柳庵三男が相良知安である。寛斎は、医学寮に学び、安政5年から適塾に蘭方医学を三カ年学んだ。文久元年（1861）に佐賀藩医学校好生館の指南役となる。万延2年（文久元年・1861）頃、当時好生館医学生だった峯源次郎の『日曆』には、緒方洪庵が訳し、佐賀藩医の大庭雪斎が校訂した『扶氏経験遺訓』を相良寛斎や峯源次郎ら、好生館教師と医学生が会読している姿が記録されている。適塾の影響も確実に好生館

に伝わっていた。寛齋は安定と名乗って、慶応 2 年（1866）には長崎でオランダ商館医ボードインにも学んでいる。幕末・維新时期には好生館教師として西洋医学を医学生に教授した。明治 7 年（1874）に死去。

◆西岡周碩は、佐賀藩医西岡春益長男として天保 6 年（1835）に佐賀に生まれた。安政 6 年（1859）に適塾に入門し、文久 2 年（1862）の芦島での解剖に、第二胸部解剖担当として参加した。維新後は酒田県大参事、東京府少参事などを歴任し、ヨーロッパ視察後、大審院勤務を経て、函館控訴裁判長を最後に官職を辞して、書家西岡逾明として名をなした

◆福地文安は佐賀藩侍医福地道林の子として生まれた。嘉永 4 年（1851）に文安が 11 歳のとき、道林が参勤交代途中で没した。文安は 11 歳で家督を相続したが、当時、医業免札制度が出されたばかりで、医業未熟のものは医師として免許されず、父の石高も召し上げられたため、たちまち貧窮した。親戚の医師らの援助を得て、ようやく藩命を得て、同藩大須賀道貞、古賀元才とともに適塾に入門した。適塾入門中の文久 3 年に文安が没したため、福地医家は断絶した

◆万延 2 年（1861）に入門した花房元淑は「安政の佐賀藩士」には花房三柳の子として記され、「元治元年佐賀藩拾六組着到」には、「花房元淑、切米九九石、内治」とある。

◆佐賀県域適塾門人の中村俊策・斎藤春庵・角春静が出自不明であるが、名前からしてほぼ医家出身と推察される。佐賀出身適塾門人は、ほぼ全員が医家出身で、退塾後も、佐野常民や本野周造、西岡逾明らを別として、大半が医家として活動していた。

◆『扶氏経験遺訓』が好生館の教科書として使用されていたことの事例からもわかるように、酒井シツ氏の調査によれば、佐賀藩医学校好生館の教科書は、適塾で使用していたものはほとんど使われており、好生館は、適塾の医学教育の影響を強くうけていたことをうかがうことができる。それは、好生館の西洋医学教育の中心に、緒方洪庵の友人である大庭雪斎がいたからにほかならない。

編集後記

◆『会報』110号をお届けします。◆皆様のご協力のおかげ様で『佐賀医人伝』が大好評で、品切れ寸前です。改訂版を準備することになりました。編集委員の皆さんよろしく御願います。◆今号も多久島さんから投稿いただきました。今回は、一遍舎十九として知られる文人蒲原大蔵の著作から、明治初期の医療事情を拾ってもらいました。蘭方医の増加の風潮がよく描かれています。◆適塾への肥前出身門人は、その多くは医家出身で、蘭学と蘭方医学を学ぶために出掛け、多くは帰郷して、医業を継いだものでした。◆佐賀県メディカルセンターが旧好生館跡地にオープンしました。一階に佐賀医学史コーナーがあります。種痘の像の緞帳が見事です。ぜひ一度お出かけください。◆25人の明治維新に関する佐賀の「偉人」像が、駅前から県庁に続く大通りにお目見えします。3月3日がその除幕式です。あらたな観光名所になるとよいですね。◆佐賀城下ひなまつりが2月から始まり、明治維新 150 年展が3月から、医学・薬学展も6月から始まりです。今年は、佐賀の各地で維新 150 年関連行事が続きます。歴史になにを学び、なにを伝えていくべきか、改めて考えることが多い 1 年になると思います。（青木歳幸）